

# 沿岸漁海況調査 (昭和49年度)

山本 達雄・野沢 正俊

沿岸定点(水深100m以浅)の海洋観測と県内及び県外の漁況を収集し、資源変動及び漁場形成要因を究明する。

## 調査方法

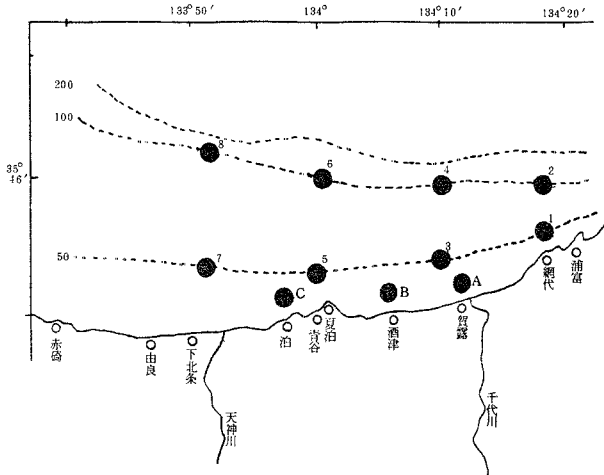
### 1 海況調査

#### (1) 調査実施船

船名 第二鳥取丸(1986トン D100PS)

船長名 西山 勇二(乗組員数 4名)

#### (2) 観測定点



定 N-E点	1	2	3	4	5	6	7	8	A	B	C
N	35°36'	35°40'	35°35'	35°39'	35°34'	35°40'	35°34'	35°41'	35°33'	35°32'	35°31'
E	134°17'	134°17'	134°10'	134°10'	134°00'	134°00'	133°52'	133°52'	134°11'	134°05'	133°56'

図1 海洋観測定点

(3) 調査項目

気象：天候 気温 風向 風力 気圧

海象：海深 水温 塩分 ウネリ 透明度 潮目 波向 波浪

(水温、塩分の観測層：0 10 20 30 50 75 100 m)

(4) 実施概要

表1 海洋観測実施概要

調査年月日	船名	測点数	欠測点数	備考
s 49年4月17日	第二鳥取丸	10	1	st、3~8の水温・塩分は水深30mまで測定
5月16日、17日	〃	11	0	
6月7日、8日	〃	11	0	
7月1日、2日	〃	11	0	
8月8日、9日	〃	11	0	
9月4日、5日	〃	11	0	
10月7日、11日	〃	11	0	
11月11日、16日	〃	7	4	

2 漁況調査

県下の中核漁港である網代（東部）、泊（中部）及び赤碕（西部）の三漁業協同組合から毎旬の魚種別及び漁業別の漁獲量を収集した。

表2 沿岸漁海況速報の配布日・配布先

調査結果

海洋観測の調査結果及び県下の三漁協から収集した漁況情報は、沿岸漁海況速報として表-2のとおり関係機関へ配布した。

1 海況の推移 (図2~4)

4月：水温についてみると最低水温期を脱し昇温期に入り、表層は18.70~15.20℃となっている。

速報配布月日				配布先	対象魚種
月	上旬	中旬	下旬 (翌月)		
4	—	30	14	水産課、県漁連、	スルメイカ(沿岸)、
5	20	28	7	県漁連境支所、水産	ブドウイカ(ケンサ
6	17	28	18	事務所、境分場、農	キイカ)、ソデイカ、
7	19	29	9	林統計事務所、島根	ハマチ、トビウオ、
8	21	30	7	水試、東、浦富、田	シイラ、キス、タイ、
9	18	26	15	後、網代、福部、賀	ヒラメ、メバル、イ
10	26	30	8	露、酒ノ津、青谷、	タヤ貝
11	21	(12月)	12	夏泊、泊、赤碕、御	
12	20	28	16	来屋、淀江、米子、	
				弓北の各漁協	
	1	23	28		
	2	21	—		
	3	—	29		

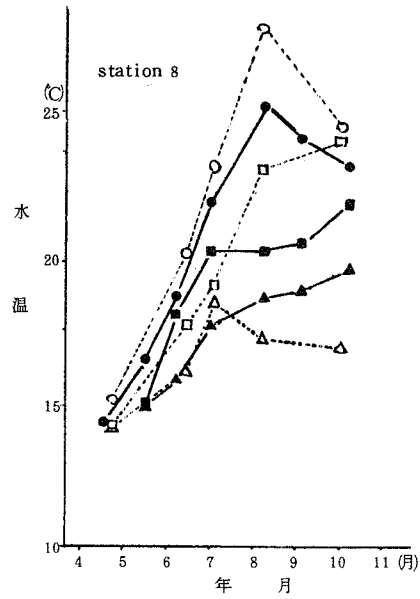
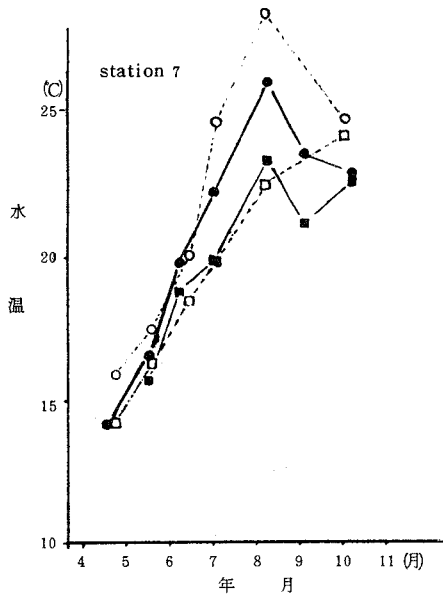
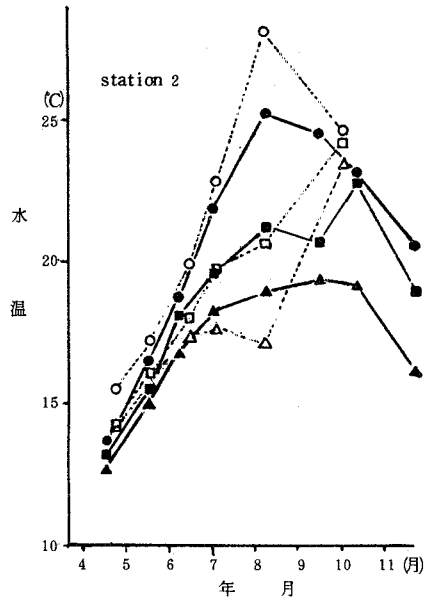
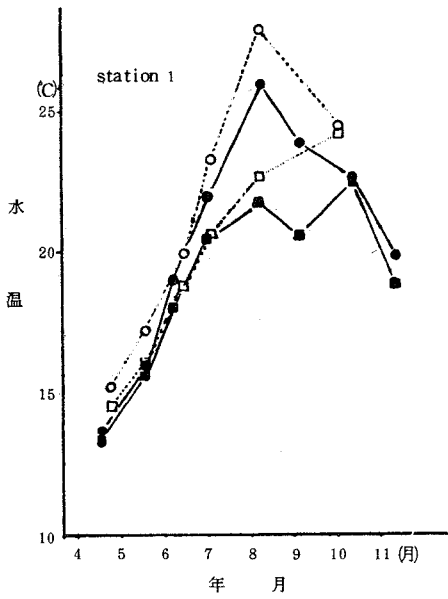


図2 各定点の月別水温変化

注) ●、■、▲：昭和49年      ○：水深 0 m  
 ○、□、△：昭和48年      □：水深 50 m  
    △：水深 100 m

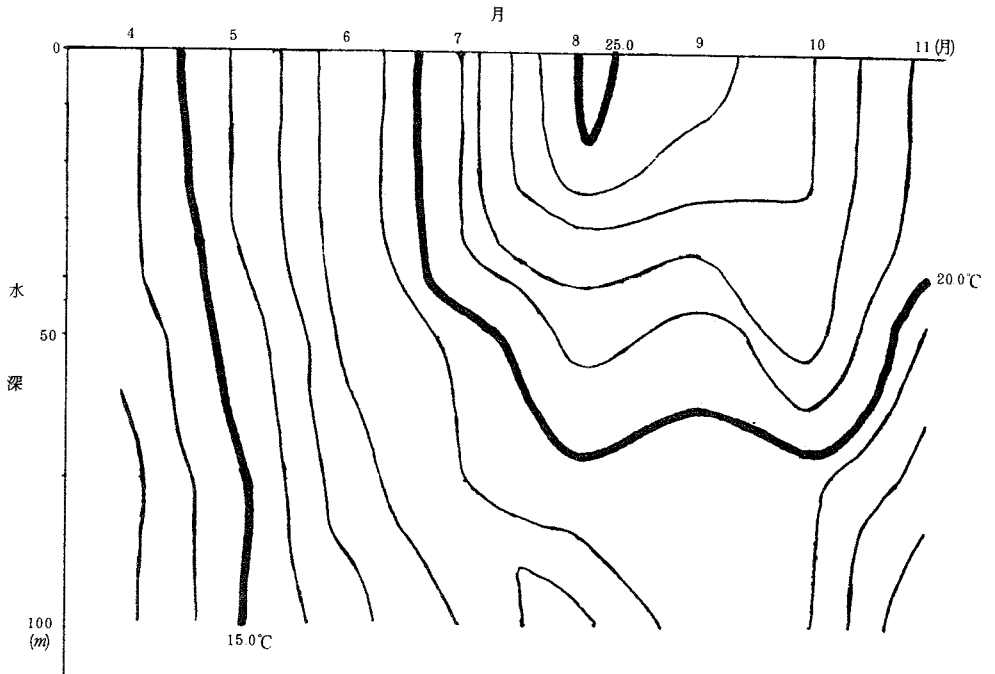


図3 網代沖 (st 2) における水温分布

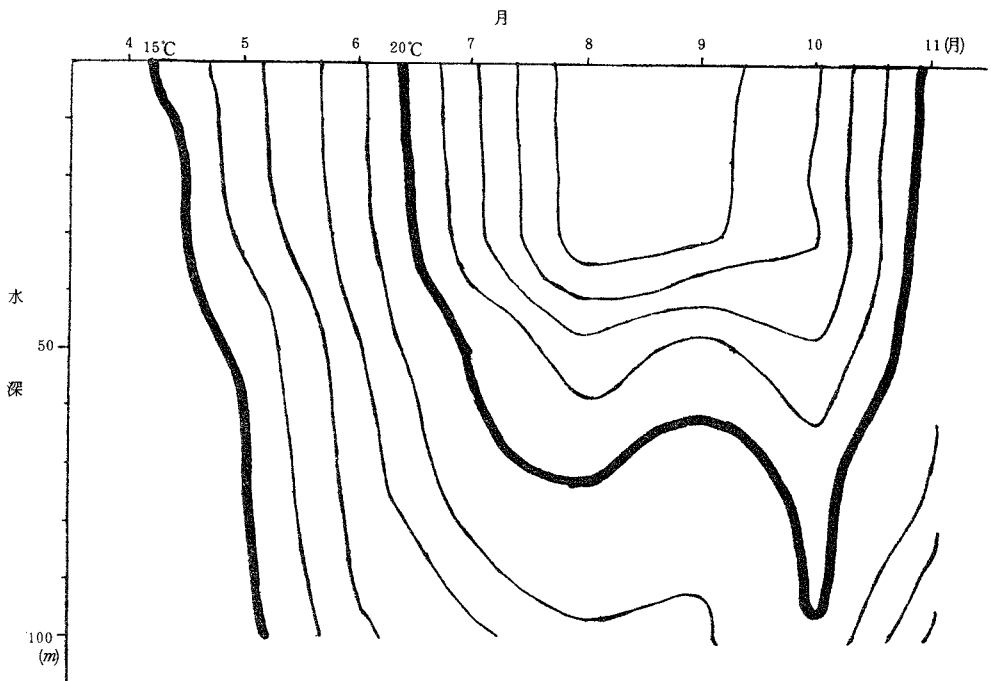


図4 青谷沖 (st 6) における水温分布

また、水平的にみると長尾鼻を境にして東部が13℃台、西部が14～15℃と西部が高目となっている。昨年同期と比較すると各定点とも1.0～1.5℃低目となっている。

塩分は50m等深海域（以下50m線と略す）は下北条沖を除いて33～34‰と低かんである。

5月：水温は、表層が15.90～16.90℃、中層（水深50m）が15.02～15.81℃及び下層（水深100m）が14.49～15.01℃であり、表層は4月中旬より2℃前後高目となっている。水深75m付近に15℃等温線が形成されている。水平的にみると、表層は網代沖を除いては東部及び西部とも差はみられないが、中層及び下層は東部が“やや高目”となっている。昨年同期と比較すると各層とも1℃低目で推移している。

塩分は50m線の表層は34.3～34.5‰台と“平年並み”となり、100m等深海域（以下100m線と略す）の表層は34.6‰台となっている。中層及び下層は34.6‰台で昨年同期より“やや高かん”となっている。

6月：水温は、表層が18.70～19.80℃、中層が17.94～18.80℃及び下層が16.54～16.84℃であり、5月中旬より2～3℃高目となり順調に昇温している。昨年同期と比較すると、表層及び下層は0.5～1.0℃低目であるが、中層は“やや高目”に推移している。

塩分は、表層が34.3～34.6‰台、中層が34.5～34.6‰台及び下層が34.6‰台であり、5月中旬とほぼ同様である。昨年同期との比較では、各層とも“やや高かん”に推移している。

7月：水温は、表層が21.80～22.40℃、中層が19.56～20.53℃及び下層が17.62～18.24℃であり、表層の水温上昇率は、平年に比べて小さくなっている。昨年同期と比較すると、表層は1.0～2.5℃低目、中層は“昨年並み”か“やや高目”、下層は4月以降低目に推移していたが今月は“やや高目”となっている。

塩分は、表層が33.8～34.1‰台、中層が34.1～34.3‰台及び下層が34.4～34.5‰台となっている。昨年同期と比較すると、表層は“やや高かん”に、中層は“やや低かん”に、下層は“昨年並み”に推移している。

8月：水温は、表層が24.90～26.20℃、中層が20.37～23.43℃及び下層が17.59～18.75℃となり、7月上旬に比べ表層は3～4℃、中層は1～3℃高目となり、下層は東部で低目、西部で高目となっている。昨年同期と比較すると、表層は依然として2～3℃低目に推移し、6月以降“やや高目”であった中層も低目となっているが、下層は0.5～2.0℃高目に推移している。

塩分は、表層が33.29～33.42‰、中層が33.60～34.09‰及び下層が34.14～34.16‰であり、水深50mまではほとんど33‰台である。昨年同期と比較すると、表層は“やや高かん”で、特に東部がこの傾向が強い。中層及び下層は“やや低かん”となっている。

透明度は15～23mで東部の50m線の低いのが目立つ。昨年は全域20m以上であった。

9月：水温は、表層が23.40～24.50℃、中層が20.16～22.07℃及び下層が18.88～19.29℃となっている。表層は8月上旬より0.5～2.5℃低目となり、年間最高水温期は過ぎたようである。下層は東部が1.5℃高目、西部が前月並みである。

塩分は、表層が33.55～33.75‰、中層が33.89～34.04‰及び下層が34.07～34.11

%となっている。

10月：水温は、表層が22.60～23.50℃、中層が21.88～23.07℃及び下層が18.18～19.97℃となっている。9月上旬と比べると、表層が0.2～1.4℃低目、中層は逆に1～2℃高目となり下層は東部で“低目”西部で“高目”となっている。水深50mまでは、ほとんど温度差がなく鉛直混合が進行しているようである。昨年同期と比較すると、表層及び中層は2℃前後低目となっている。

塩分は、表層が33.3～33.4‰台、中層が33.4～33.8‰台及び下層が34.1～34.3‰台となっている。9月上旬に比べて中層までは“低かん”となっているが、下層は“高かん”となっている。100m線の水深50mまではほとんど塩分差はなく、水深50～70mに躍層がみられる。昨年同期と比較すると網代沖を除いて水深30mまでは昨年より“低かん”それ以深は“高かん”となっている。

11月：水温は、表層が18.80～20.50℃、中層が18.56～19.83℃及び下層が16.18～16.92℃となっている。10月上旬と比べると、表層が3～5℃、中層が2～4℃及び下層が2～3℃低目で急激に低温となっている。

塩分は、表層が33.6～33.8‰台、中層が33.7～33.8‰台及び下層が34.2～34.3‰台となっている。各層とも10月上旬と比べると“高かん”で推移している。

## 2 漁況の推移 (図5～図8)

4～5月：スルメイカ(沿岸)は、東部では昨年より一旬早い4月上旬から釣獲され、中旬に1隻当たり162kgの漁獲量があったが、それ以後は低調に推移している。中部では、キス漁が4月中旬から始まり5月に入り1隻当たり10～13kgの漁獲量で推移している。トビウオ漁は、中部及び西部とも5月下旬から本格的に始まっている。漁況は県下全般に5月中旬ごろから活況となっている。

6～7月：東部はスルメイカ主体に、中部及び西部はトビウオ及びシイラ主体の漁況で推移している。6月の東部のスルメイカは1隻当たり178～267kg、中部のトビウオは1隻当たり492～527kg、西部のトビウオは1隻当たり967～1,167kgといずれも昨年を大きく上回る漁獲量となっている。ブドウイカ(ケンサキイカ)は、来遊が遅れ県下全域で低調に推移したが、7月中・下旬にはやや回復し、東部及び西部で昨年をやや上回っている。シイラは、来遊が昨年より一旬早い6月下旬から漁獲が始まり、来遊量も多く漁期初めから多獲され、1隻当たり漁獲量は東部で320～1,048kg、中部で93～282kg、西部で550～1,101kgと好調に推移している。イタヤ貝は、1隻当たり漁獲量が中部で75～126kg、西部で136～215kgとなっている。

8～9月：シイラは、東部で8月に、中部で9月に漁獲量の減少がみられたが全般的に好調のまま終漁期を迎えている。ブドウイカ(ケンサキイカ)は、県下全域で低迷状態が続いているが、西部では9月中旬ごろから回復の兆しがみられる。東部のソデイカは昨年より一旬遅く初漁があり、1隻当たり漁獲量は5～15kgと昨年同期の $\frac{1}{4}$ 程度の漁獲量である。ハマチは中部及び西部で若干の漁獲がみられる。イタヤ貝は1隻当たり漁獲量が中部で19～166kg西部で60～302kgとなっている。

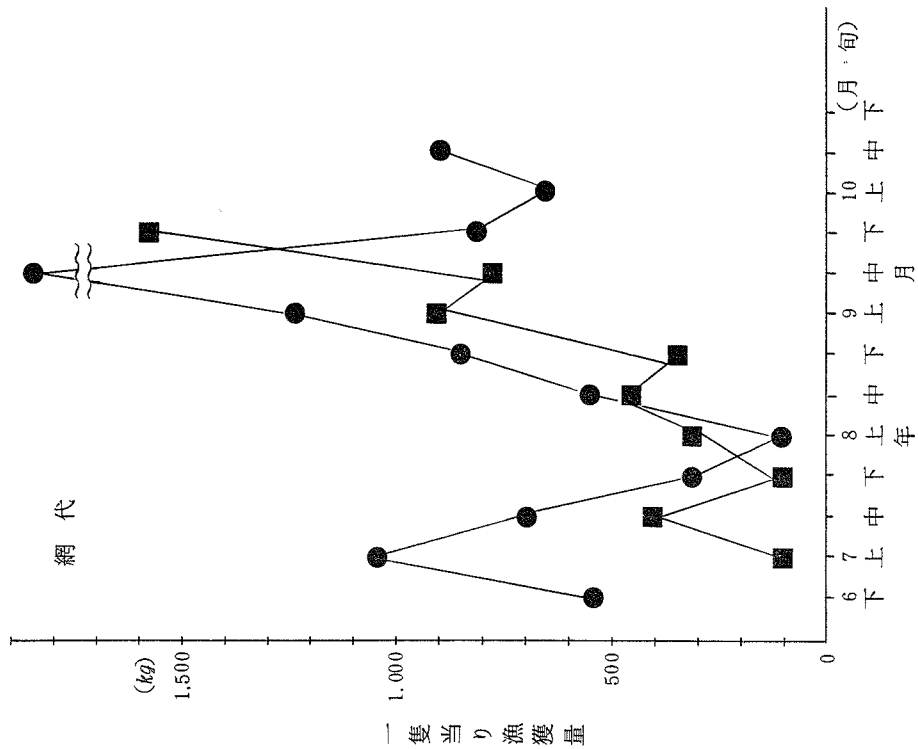
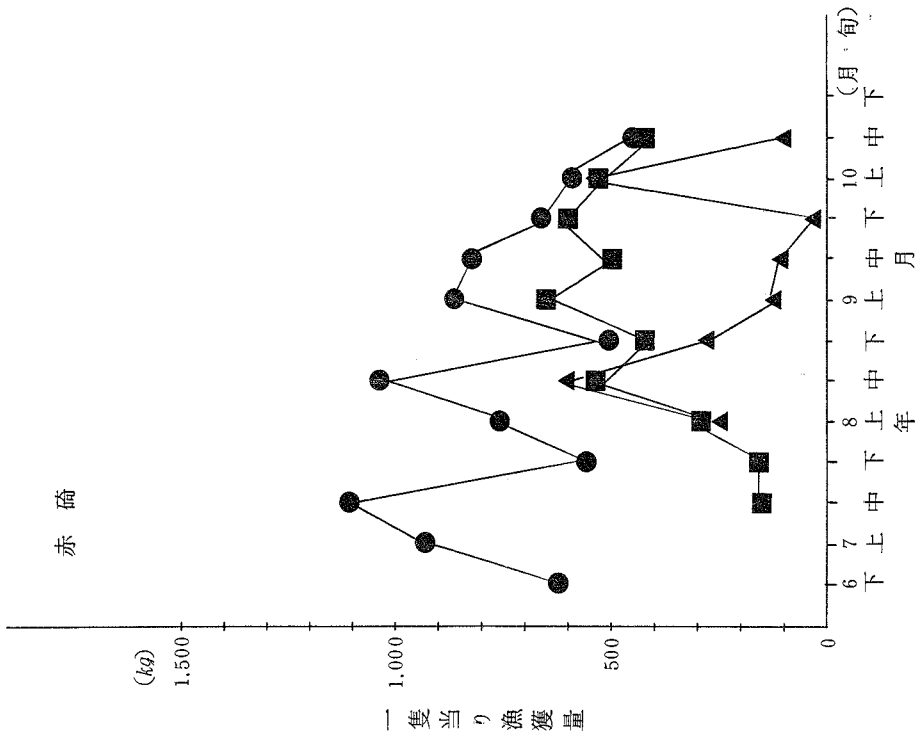


図5 網代、赤碓におけるシイラの1隻当り漁獲量の年別、旬別変化

注) ●：昭和49年、■：昭和48年、▲：昭和47年を示す。

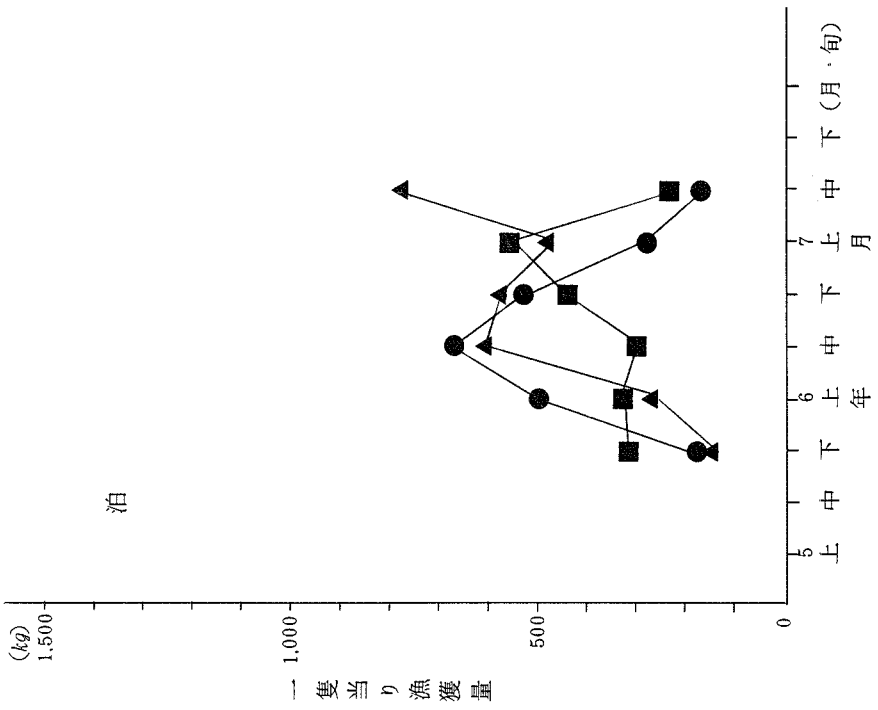
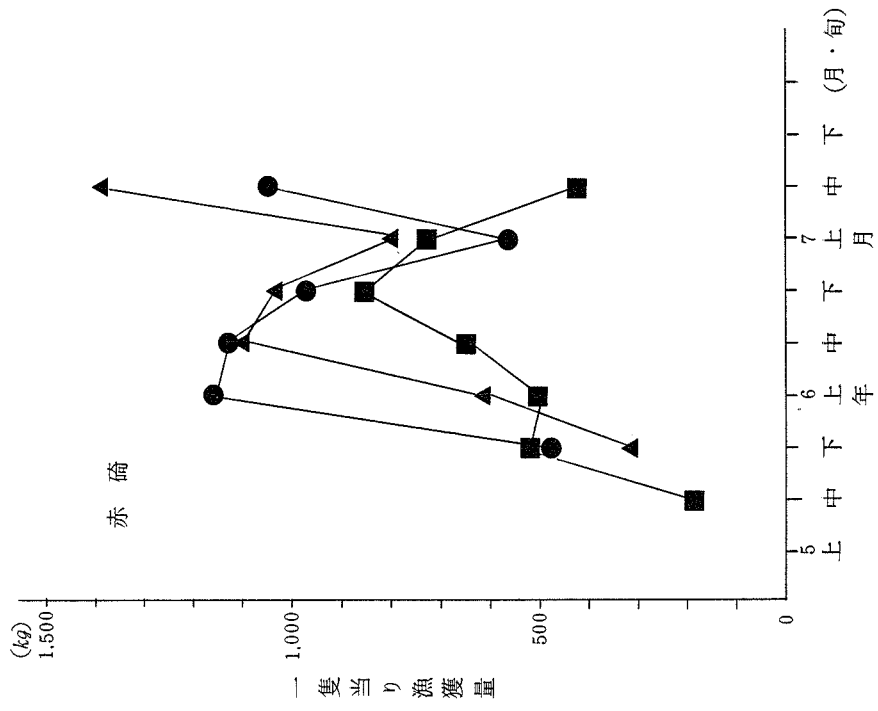


図6 泊、赤碓におけるトビウオの1隻当り漁獲量の年別、旬別変化  
 注) ●：昭和49年、■：昭和48年、▲：昭和47年を示す。



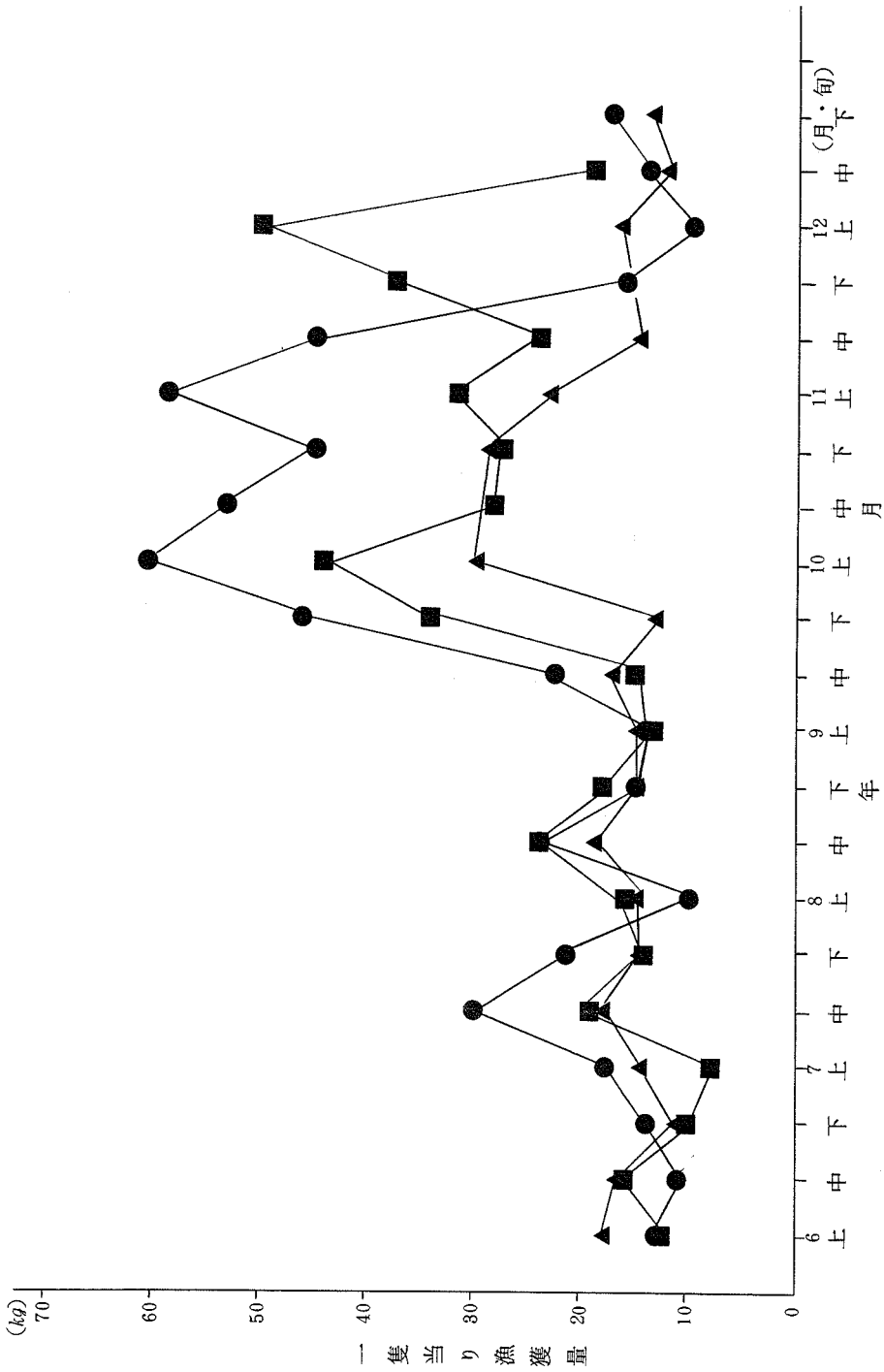


図7 赤碓におけるブドウイカ（ケンサキイカ）の1隻当り漁獲量の年別、旬別変化

注) ●：昭和47年、■：昭和48年、▲：昭和49年を示す。

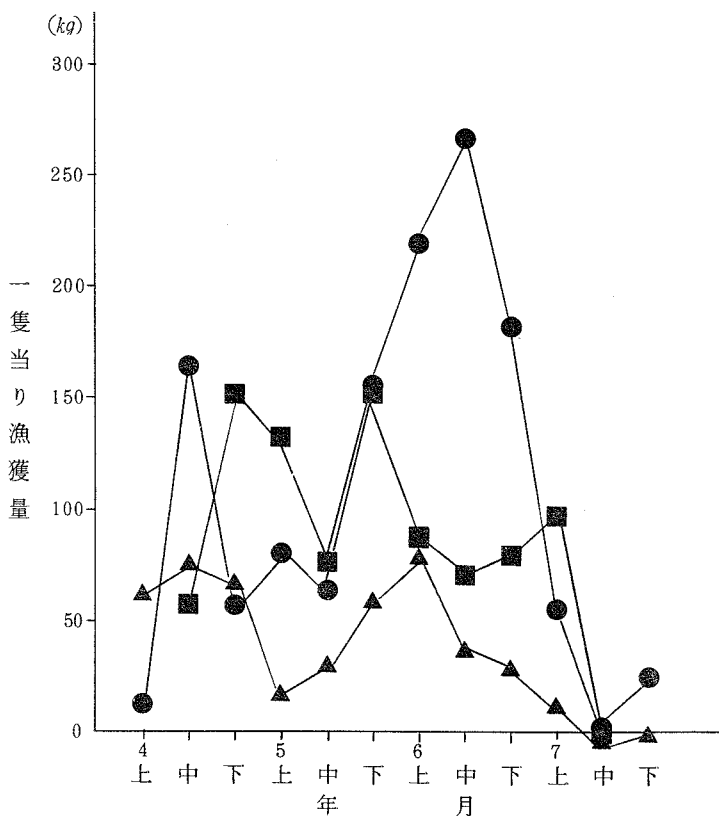


図8 網代におけるスルメイカ（沿岸）の1隻当り漁獲量の年別、旬別変化

注) ●：昭和49年、■：昭和48年、▲：昭和47年を示す。

10～11月：ブドウイカ（ケンサキイカ）は西部では1隻当り37～61kgと昨年同期を上回る漁獲であるが、中部及び東部は昨年並みか昨年を下回る漁獲量となっている。ソデイカは低迷のまま終漁となり漁獲量は昨年の $\frac{1}{3}$ 程度であった。ハマチも低調に推移している。

12～1月：12月に入り中部及び西部ではハマチが好漁となり、1隻当り漁獲量は中部で17～165kg、西部で122～260kgとなっている。1月は荒天、時化の日が多く出漁日数が少ない。

2～3月：タイ、ヒラメ、メバル等の底生魚主体の漁況となっている。